

場の衛生係と病院の健康管理部も参加する。

いちばん喜んだのは女性の推進員だった。経験の深い衛生指導員が、ああだこうだといろいろ教えてくれる。受診勧誘のとき、あの家はこういうふうにやったほうが上手くいくよとアドバイスしてくれる。それに合同の学習会や視察研修旅行もある。

松川町の「健康を考える会」の発表会にも、交代で二回も見学した。今までも衛生指導員たちは何回か見学しているが、このグループでは初めてだった。これがブロック会の活動を根本的に変えるきっかけになった。

見学に参加したある指導員は、「今まで衛生指導員として活動していたけど、どうしても役場と病院におんぶに抱っここの面が多かった。松川町を見て、住民のグループが自分たちでテーマを考え、研究し、発表しているのはびっくりした」と語る。

衛生係の須田さんは、「このやり方だ!」と思った。一年間かけて自分たちの好きなテーマで研究や調査をする。そしてその結果を発表する場をつくる。一年で出来ないことは何年でも継続してやる。このやり方を八千穂村でもやろうと企画したのであった。

必ず新しい発見がある

衛生指導員の中には、「こういう調査や研究などは、すでに医者がやっている。今さら我々

がやることはないではないか」という声もあった。しかし、須田さんは、「自分の目で確かめてみると、必ず新しい発見がある。自分たちが取り組むことが大事なのだ」と説得した。

この新しい取り組みは平成三年度から始められた。そして取り組んだ結果は、必ず毎年の「健康まつり」で発表することにした。

そこで各ブロックごとに衛生指導員、女性の健康づくり推進員、衛生部長さんたちが集まって、まずテーマを検討することから始めた。

「基本的には自分たちの好きなことをやってよい」ということであつたが、こんなことは初めてなのでみな慣れていない。いざ選ぶとなるとなかなかテーマが決まらず、どこでも苦勞したようだ。

上畑宮前地区ブロックでは、渡辺憲太郎さんを中心に、「昔と今の弁当の移り変わり」というテーマでやることにした。作り手と食べ手のつながりと時代の変化が、弁当の中に映し出されることに気づいたからであつた。

弁当箱も各家庭にある古い弁当箱を探してもらい、それぞれに当時の献立をつくってそれに盛って供覧した。三十年昔のアルミの弁当はいつも梅干しを同じ場所に入れるため、その部分が腐食して穴が開いているものが多かった。

おかずの内容をみると、卵焼きと魚は常に使われたが、その他では、昭和三十年代はでんぶ、

煮物、切りイカ、漬物、四十年代になるとウインナーソーセージやとりのから揚げ、エビフライなどの冷凍食品が目立つようになる。五十年代は漬物に代わってレタス、ミニトマトが主になった。

弁当の移り変わりは「おかず」の移り変わりである。たった一つの弁当にも、その時代の食生活の姿が見える。ただ弁当は当時の家庭での食事にくらべて一般に豪華で、親のこまやかな愛情が伺われ、皆思わずホロリとしたという。

さらに進む地区ブロック活動

自分の体の歩みを知る

中央・高岩ブロック会では、指導員の井出高正さんを中心に、女性の健康づくり推進員や区長、衛生部長さんとともに、「健診で見た私の体のあゆみを知る」というテーマで取り組むことにした。

ブロック会でいろいろ話をしていく中で、昭和三十四年に健診が始まってから、三十二年間も毎年欠かさず受診している人が多いということが分かった。そこで皆でお互いの健診結果か

ら見た体の変化を、経年的にグラフにしてみようじゃないかということになったのである。

検査項目では、データの变化が分かりやすい血圧、コレステロール、血色素の変化を取り上げた。また肩こりや腰痛など、体の痛み具合が分かる農夫症候群の項目も取り入れた。総合判定や生活の変化の様子も分かる範囲でグラフ化してみた。

これはなかなか良い着想であった。年を追うごとに次第に検査異常や疾病が増えていくのがグラフでよく分かったし、自分たちの体を見直すよい機会となった。

中には昭和三十五年から欠かさず健診を受けていた九十五歳になる男性で、血圧もコレステロールも血色素も三十二年間殆ど変わらないばかりか、農夫症はむしろ減っていたという例があった。これには皆びっくりしたという。

生ゴミで堆肥づくり

天神町ブロック会では、指導員の岩崎正孝さんが中心になってゴミ収集の問題に取り組んだ。今まではゴミの提出の仕方が一定してはず、集められたゴミの山は大変汚かった。村では、ゴミの収集袋を指定の袋にして、燃えるゴミと燃えないゴミとを分けて提出するように呼びかけていたのだが、なかなか徹底しなかった。

それに、他地区の親が、子どもを学校へ送りながらついでにゴミを捨てて行くというの

る。袋も指定の袋ではなく、買い物に使うビニール袋が主だった。「再利用だからいいじゃないか」とうそぶく人もいた。

そこで、きちんと指定の袋に入れて提出するように、手分けして街頭指導を行った。岩崎さんも毎日、現場に足を運んだ。衛生部長さんに熱心な人がいて、熊手を持って行って「それはダメだ」と注意してくれる人もいた。やがて次第にこのやり方は徹底し、全村に普及していった。

さらに岩崎さんは、ブロック活動の一つとして、生ゴミを堆肥として利用する方法に力を注ぐ。

現在の地球は著しく汚染が進んでいる。せめて自分たちの生活の中から出る生ゴミくらいは堆肥化して地球に戻してやりたいというのが、岩崎さんの願いであった。

そこでアンケート調査を試みたら、生ゴミを利用しての堆肥化センターを作ってほしい、コンポスター（生ゴミなどで堆肥をつくる容器）を支給してはどうか、講習会をして良い堆肥づくりを教えてほしいなどの意見が多かった。

堆肥化センターについては村では計画がないということで、岩崎さんらは、コンポスターの使い方についての講習会に重点を置き、それによる堆肥の作り方をくわしく説明してまわった。多くの人が集まって受講し、次第にコンポスターの利用者が増えていった。

その他にも様々な調査研究が行われた。「薬草について」「足腰の痛み予防」「歯の健康を保つには」「台所仕事の変化」「高齢者問題に取り組んで」などである。各ブロック会の発表は、毎年の健康まつりの日と決められたが、これがまた健康まつりの内容を高めるのに大いに役立った。

村の霊園に酒を埋めて

変わった研究では、清水町・千ヶ日向ブロック会で、指導員的小林茂松さんと内藤恒人さんが中心に行った実験がある。最初は「体をこわさないお酒の飲み方」というテーマで学習したが、どうもありきたりで面白くない。ちょうどその頃念仏講で、ある古老から、「仏が抱いた酒はとてもうまい」という話を聞いた。

昔は土葬だったから、お酒の好きな人が亡くなると、一緒に酒の一升ビンを埋める。他の人が亡くなったとき近くを掘るのだが、そのビンが出てくる。それを飲んでみると、全然酒の味が変わっていないばかりか、むしろ味がよくてとてもうまいというのであった。

酒好きの二人がこれを見逃すわけではない。早速これを試してみようということになった。

そこで村の霊園を利用して、お酒の一升ビンを埋めることにした。内藤さんは電気工事屋さんだから垂直の穴を掘るのはお手のもの。あつという間に機械で深さ一メートルの穴を掘った。

ビンには後で出せるように目印の紐をつけ、温度計とともに埋めた。

温度計は地中の温度を測るため、毎日ウォーキングをしている女性推進員が週二回計った。一冬をはさんで十カ月間埋めたが、温度は最低マイナス二度、最高十九度だった。これは酒蔵の温度と似ているという。

十カ月経って地中から掘り出し、靈園、台所放置（一度開栓と未開栓）、新酒の四本のビンと並べて利き酒形式でテストをした。その結果、地中に埋めたものが最もまろやかでうまいということになった。

これはアルコール分が少しとんだのではという意見もあったが、村内の酒造会社の成分分析ではアルコール度には変化がなかった。かくして奇妙な実験は終わったが、人間の五感の精度の高さが証明されたと二人は満足げだった。

だが、酒蔵会社の杜氏^{とうじ}さんの話では、酒は新酒がいちばんうまいので、時間が経つほどまろくなるということだった。さてどちらが本当なのだろうか。

VIII

八千穂村のよいところ悪いところ



健康相談をする受診者

健康管理に助っ人現れる

青年団の気概を受け継いで

平成三年九月、新しく高橋秀一村長が就任した。就任に当たって村長はこう述べた。

「昭和三十四年に全村健康管理を始めたときは、こんなことをやっている町村はどこにもなかった。当時としては画期的なことだったと思う。永年の健康管理で成果は大いに出ている。私も当然これを引き継いでいくが、マンネリ化にならないよう健診メニューを増やして充実していきたい」と。

その言葉どおり、その後徐々に健診内容は充実していった。実直で使命感にあふれた村長だった。

村長と同級生には、かつて衛生指導員会長を務めた井出佐千雄さんや小宮山則男さんがいる。また助役には、以前に指導員を九年務めたことのある油井理一郎さんが選ばれた。健康管理と衛生指導員活動に、さらに追い風が吹いたことはいうまでもない。

平成五年になって、指導員の四年の任期が来て多くの交代があったが、岩崎正孝さんと井出

高正さんはさらにもう一期続けることとし、それぞれ会長と副会長になった。二人とも熱心に取り組んでいた地区ブロック活動と月一回の学習会には、さらに力が入った。

岩崎会長さんは、昭和四十三年当時、八千穂村青年団の団長をしていたが、そのときに「八千穂夏季大学」を立ち上げた一人である。当時は青年団活動がさかんであったが、このままでは農村青年は取り残される、なんとかしなければという思いから、自分たちの血となり肉となる学問の場をつくろうということで、夏季大学の開催を思い立った。

でもみんな昼間は仕事がある。大学の講座は夜の八時から十時までと設定した。初年度のテーマは「現代におけるヒューマニズム」、務台理作氏の同名の著書がテキストだった。二年目は「人間」をテーマに「現代における人間」と「神と人間」の分科会が持たれた。

難しいテーマだったが、都会の学生に負けるものかとみな真剣だった。講師には東大や慶応大の教授のほか、作家の遠藤周作氏も姿を見せた。

討論形式の講座なので、時には延々夜が白むまで討論が続くほどだった。当時、講師の一人だった野沢北高校の中島二郎教諭は、「高校の教室とは違った真剣さと、若い青年の意気込みがあった」と話している。

衛生指導員も青年団に入っていた人が多く、ここで勉強した人もかなりいる。指導員たちが今も熱心に学習活動を続けているのは、かつての青年団の気概を受けついでいるからなのであ

ろう。

若々しくピチピチして

平成六年になって、衛生指導員にとって画期的なことが起きた。新しく八巻好美保健師さんが着任し、それに新しい衛生係（後に係長）として須田芳明さんが決まったのである。この人事が、ときにはぎくしゃくとしがちであった役場と衛生指導員との関係を大きく変えることにつながった。

八巻さんは当時白田町の保健婦をしていたが、高橋村長と当時の住民課長だった佐々木徳治さんが八千穂村へ引っ張ったのである。「保健婦は若くなくて、更年期の人でいいと言われたので安心して来た」と八巻さんは笑ったが、もう四十歳を過ぎていたけど、更年期どころか、若々しくピチピチしていた。

当時森智子さんという保健婦さんがいて、夜遅くまで頑張ったり、衛生指導員といっしょに劇に出たりして、皆の評判もよかった。七年も務めたが、なにしろ保健婦が二人しかない時期が多く、随分苦労した。八巻さんが来て漸く三人になった。

八巻保健婦さんは明るくて、気さくで、人なつっこい。「衛生指導員というのは半分ボランティアでしよう？ だけど、夜、指導員会をやるよと言えば、すぐ皆が集まってくる。そういうこ

とがすごいことだと思う」と八巻さんは率直に感心する。「お互いに仲よくやろうね」というのが八巻さんの第一声だった。

組織は楽しくなければいけない

八巻さんも須田芳明さんも、衛生指導員の夜の勉強会には必ず出た。指導員といっしょに話したり飲んだりする機会も多くなった。「会議が終わったあと、俺たちとよくつきあってくれた」と指導員たちは今でもよく言う。

「組織というのはまず楽しくなければいけない。そこが一番ポイントだと思うね。どんなに立派な組織をつくっても、楽しくなければ三年とは持たない」というのが、須田さんの持論だった。

さらに須田さんは言う。「行政というのは上からの押し付けだけでは駄目だ。それで一時は住民は動くかも知れないが、長続きはしない。お互いに身近で話ができ、言い合いができなければ、組織は動かないじゃないですか」と。

今までは、衛生係と指導員とは上と下の関係で、仕事でつき合っているという意識が強かった。それが八巻さんと須田さんの二人が来てから、役場の保健衛生担当と住民という仕事の関係の域を超えて、お互いに友だちに近い関係になった。思ったことは何でも気軽に言い合える。

これが衛生指導員活動をいつそう活性化させることになった。

八巻さんは誰とでも気軽に話す。村長室へ入って行って、血圧測定しながら「こんなことじゃだめじゃないの」とずけずけ言える人である。

それに人とのつながりを進めていくのがうまい。人をやる気にさせてくれるような、人を巻き込むのがすぐれているというところが八巻さんにある。「実はそれを八巻さんから学んだのだ」と須田さんは後で述懐する。

二人が来てから村の保健衛生のやり方が変わってきた。

須田さんは控えめに、「ともかく皆は村が好きなんだよ。この村のために皆でやろうじゃないか。ただそれだけなんだよ」と言うのだが。いつの間にか衛生指導員たちも、単に健診業務だけでなく、「いっしょに活気のある八千穂村をつくろう」という考えに変わってきた。

ユニークな茂松・恒人コンビ

同じブロックの同級生

農村では同じ名字の人が多し。とくに山の中へ行くほどそれが多くなる。八千穂村でいえば、

最も多いのが佐々木で、次いで井出、篠原、須田、渡辺、小宮山などの姓が多くを占める。だから呼ぶときは姓で呼ばず、みな名前で呼ぶ。とくに親しい場合は、「さん」までも省く。

衛生指導員の「茂松!」「恒人!」と言えば村の人ならすぐ分かる。正しく言うと、小林茂松さん、内藤恒人さんだが、以前に聞いたことのある名前だと言われる方はかなり記憶力がよい。お酒を墓場の土の中へ埋めて実験したという、例の盤園コンビである。

二人とも平成五年に衛生指導員になった。しかも同じ地区ブロックの担当である。このコンビが、後に指導員の会長と副会長をやるようになるのだが、その活躍たるやなかなかユニークだった。二人とも大の酒好きだが、単に酒好きだからということだけじゃない。

茂松さんは、変わった能力の持ち主だ。話好きで唾を飛ばして大声で喋るのだが、話しているうちに皆をいつのまにか友達にしてしまうのである。理屈は全然言わない。それでいてみんなを「じゃあ、やろう!」という気持にさせるのがうまい。

また茂松さんは、人の悪口は絶対言わない、うそはつかない、裏表がない、打算がない、言ったことは必ず実行するという人である。どこかの国の政治家に聞かせたいようなことだが、それで皆から好かれた。

頼まれたことは一度もいやとは言わないから、衛生指導員の演劇では、大体主役をやることが多かった。会社の仕事は三交代で夜勤も多く不規則。「今日は練習が終わったら、夜勤に行

かなくちゃいけねえ」と言いながら劇に熱心に参加していた。

唯一の欠点は台詞の覚えが悪いことだ。だから演出の高見沢さんにはしょっちゅう怒鳴られて放し。それでもしょげた様子もなく、ハイハイと懸命に演じていた。

ケチヨンケチヨンにやられる会長

指導員会の会長になったときは、皆からケチヨンケチヨンにやられることも多かった。「こんなにケチヨンケチヨンにやられる会長なんて見たことない」と、後に保健衛生係長になった佐々木勝さんは言う。

議論がいろいろ分かれても、無理にまとめようとはしない。だが、最後はいつのまにか自然とまとまってしまうのだ。佐々木係長さんは、「住民組織の中で、上に立つ人っていうのは、こういう人かな」と思ったそうだ。アクが強くなって、押しつけもなくて、皆をその気にさせてくれる人ということなのだろう。

茂松さんは、痴呆の母親の面倒をよく見ていた。母親は茂松さんを自分の夫とっていて、オムツを代えるのは、嫁には許さず、茂松さんにしかやらせなかったらしい。

したがって茂松さんは、勤めながら毎日オムツ交換をしていたし、デイサービスへ行くようになってから、毎日その送り迎えもした。勤めながらの介護はとてもつらかったと思うが、その

大変なことをおくびにも出さなかった。

茂松さんの特技は、人の名前と顔はすぐ覚えてしまうことだ。だからいつか交通事故を起こすのではないかと皆が心配している。

というのは、車を運転していて誰か知っている人が道端を歩いているのを見つけると、窓を開けて「オーイ」と声をかけるのである。相手が気付くまで窓から首を出しながら、声かけをやめないものだから、いつかガチャーンとやるのではないかということなのだ。そんな天衣無縫なところが茂松さんにある。

意見は厳しいが発想は豊か

この茂松さんを支えたのが、副会長になった恒人さんである。

茂松さんは大まかで、どちらかというとムードメーカーだが、恒人さんはざっくばらんに思ったことをスパッと言うタイプ。ときには厳しい意見も言うが、発想豊かでブロック会議でもいろいろなアイディアを出してくれる。

「おらどうしていいか分かんねえよ」と茂松さんが時々弱音を洩らすこともあったが、「そりゃ、こうすりゃいい」といつも蔭から助けていたのが恒人さんだった。年は茂松さんのほうが上だが、茂松さんはたえず恒人さんを頼りにしていた。

恒人さんは自営業の電気会社をやっていて忙しかったから、ブロック会議には作業着のまま駆けつけることも多かった。後に社長になったが、演劇のときはいつも裏方で、持ち前の技術を生かして音響係を担当した。CDを借りてきて、BGMをつくるのは得意だった。

全く性格は異なる二人であるが、良いコンビであったといえよう。

このコンビにもう一人、会計担当として吉沢憲一さんが加わり、三人で指導員会の三役を受け持つことになった。憲一さんは若いけど、吉沢電設の社長さんである。茂松・恒人コンビほど目立たないが、社長だけあってしっかりしている。二人と地域ブロックは違うが、学習会活動はマメであった。この三役が中心となって、指導員活動はさらに拡がっていった。

これには役場の強力な支援があったことは言うまでもない。課長さんや係長さんもよく手助けしてくれた。住民課長の佐々木徳治さんは親分かたぎで、面倒見がよかった。これはよいと思えば、とことんまでやってくれた。

その後任の飯塚豊課長さんも、指導員活動を随分と支えた。指導員が交代で長野県農村医学部に研究発表するようになると、毎年役場のマイクロバスを仕立ててくれた。

役場と衛生指導員との間には、今までよりもずっと親密な関係が生まれつつあった。これを切り開いたのは、やはり茂松・恒人コンビと会計の吉沢さんだったといえようか。

酒は涙か生きがいか

アル中の例を題材にして

高見沢佳秀さんが、「酒は涙か生きがいか」という劇をつくったのは平成四年のことである。その年の八千穂村敬老会に、衛生指導員OBを中心にした公民館演劇クラブによって初演され、その後、平成六年と十四年に「福祉と健康のつどい」で再演されている。

そもそもこの劇をつくったきっかけというのは、当時衛生係だった須田秀俊さんが、「近くにお酒に没りきりの人がいて、家族がとても困っている。なんとかアル中の問題を取り上げて、皆の関心を高めてもらえないか」と、プランを持ってきたことによる。

その頃は、劇のテーマとして、お年寄りの在宅介護の問題がかなり続いていたので、高見沢さんも大賛成、早速表題の脚本が出来上がった。

例によって、アル中の父親が毎晩酒没りで、夜遅く泥酔して帰ってくる。家族が「そんなに飲むと体に悪い」と忠告しても、一向に聞き入れる様子もない。そのうち暴力を振るうようになる。しかし最終的には家族や親戚の人たちの努力で、父親は改心して酒をやめるという筋書きである。

つまりここでは酒の「涙」の部分を描いたのであるが、もちろん高見沢さんは酒の効用もちゃんと心得ている。衛生指導員の小林茂松さんが会長になったとき、高見沢さんから、「何か問題が起きたときは、必ず皆で集まって酒を飲め。そうすれば必ず本音が出てくるから」と言われた。これを茂松さんは忠実に守った。

最近では、月一回の衛生指導員会が終わると、誰言うことなく、「じゃあ、行くか」と皆で飲みに行くのが通例になってきている。もちろん指導員会にいっしょに出ている佐久病院の八千穂担当も同じだ。

酒でコミュニケーション

飯島郁夫さん（元事務長）が健管センターに医事課から移ってきたのは昭和四十九年である。すぐ八千穂担当になって指導員会にも出るようになった。その時、若月院長（当時）から、「多少経費がかかってもよいから、地域活動をしっかりやれよ」と言われた。飯島さんは、これを「地域の人のいろいろつき合っていくには酒を飲まなきゃ駄目だよ」と解釈した。

衛生指導員とは面識がなかったもので、最初はお互いに顔も分からなかった。指導員会に出ていろいろ話したり酒を飲むうち、次第に心安くなっていった。よく飲んだのは、小宮山則男、今井恭夫、岩崎正孝さんたちである。とくに会長になってからの高見沢さんとは、しきりに飲